大阪教育大学紀要　第Ⅳ部門　第26巻　第3号（昭和53年）

# 成城の読書教育と学校図書館

塩見　昇（しおみ　のぼる）
（教育学教室）

（昭和52年8月31日　受付）

大正6年に沢柳政太郎によってひらかれた成城小学校は,「科学的研究を基とする教育」を目標の一つに掲げる実験学校として，当時の公立小学校にみられない多くの，新しい試みをその教育実践において追求した。創立10年の成果をまとめた「独創的研究」20項目に，読書科の特設，児童図書館の特設，児童読物の研究が含まれている。

創設2年目の児童語彙調査をふまえて沢柳が,「読むことと書くこととは並行しない」と指摘した。これをうけて成城では，児童に大量の読書を奨励するために，総合教科的な性格のものとして読書科を特設するとともに，読方科においても副読本や一般読みものを積極的にとり入れ，教材の系統化をはかった。

そうした読書教育の実践に加えて，自学を重視するこの学校にとって，学校図書館の設置は不可欠と考えられた。

成城の同人たちによる図書館研究は，全学的に多くの教師によってとりくまれており，この学校のカリキュラム改造と密接にかかわっている。その成果は『教育問題研究』にしばしばとりあげられたほか，同人の手で二種の児童図書館経営についての著作を生みだしている。

成城の児童図書館経営と図書館教育は，国語科改造の一環という性格が強く，実験学校としての初期成城の成果の大きなものの一つであった。それはわが国における初等学校の図書館として最も早い時期の代表的なものといえよう。その実態と研究成果がひろく紹介されるとき,「学校のなかの図書館」についての理解をひろげるとともに，教育界と図書館界とをつなぐ戦前における数少ない事例でもあった。

## Ⅰ　実験学校としての成城教育

大正6（1917）年4月4日，東京市牛込区原町に一つの小さな私立小学校が開かれた。帝国大学総長，文部次官，貴族院議員，帝国教育会長などの要職を歴任した沢柳政太郎を校長とし,「合理的，科学的な教育実践」により，大正自由教育の代表的な存在として知られる成城小学校の発足である。

この学校の創設に並々ならぬ決意でのぞんだ沢柳は、すでに明治42年に著した『実際的教育学』において，教育事実の科学的探求，科学としての教育学に基礎をおいた学校教育とりわけ小学校教育の重要性を強く主張していた。「余は今日まで世に現はれたる教育学に対し頗る不満足を表するもの，此等は何れも教育学なるものの当然研究すべき問題を研究せず，否接触することすらせず，啻に実際と没交渉であるばかりでなく，何れも学者の一家言たるに過ぎざるもの」であり，本書は「従来の教育学を根本より改造せんとするもの

である」とその序文できびしく従来の教育学を批判した沢柳は，教育の事実を対象として研究することの重要性が「実際的教育学」と名づけたゆえんだと説く。すでに小学校，中学校，専門学校等「教育の事実は現に一大系統を為して」おり，その事実より研究を進めることが科学としての教育学を成立させるものであり，教育事実の科学的探求を通して規範を見出すことができるとした。教科の始期，教科書，就学年限等，これまで教育学が正面から論及してこなかった教育事実こそ，実は研究対象として価値あるものであり，そうした研究に裏づけられた学校教育でなければならないと強く主張していたのである。

沢柳の教育論は,「実際的」であるとともに「実験的」であろうとする実証主義と，改革的精神で貫ぬかれていた。「我国に於て教育学者は何れも教科論を研究して居るけれども，是を以て我国の規定の教科に対して或はその改正を促し，その修正を促すと云ふ議論を聞かない」[1]，各教科の始期はいつが適当か，なぜ授業時間は1時間とするか等について科学的根拠がないかぎり，まず疑ってかかることが大切だという指摘にそのことがよくあらわれている。

沢柳のこうした考え方をもとに創設されたのが成城小学校であり，沢柳自身この学校の性格を次のように語っている。「成城小学校は研究の為めの実験学校として生れたのであります。研究はこの学校の目的であり，精神であります。私の知人はよく私に向って,“君は理想の小学校をやって居るさうだ”と申されます。が，私は之に対して,“さうではない。理想の教育を見出さんとして努力して居るまでで，まだ理想の教育を見出したのでありません”と答へて居ます」[2]。これは創設後10年を経た時期の発言である。

成城小学校の創設趣意書は，そのめざすところの教育理想として，

1　個性尊重の教育　付，能率の高き教育
2　自然と親しむ教育　付，剛健不撓の教育
3　心情の教育　付，鑑賞の教育
4　科学的研究を基とする教育

を掲げた。革新さるべき教育の内容を示すはじめの3項は，当時，前後して新設された新学校に共通する大正自由教育の特徴であり，第4項において，そうした教育をどのような態度でとりくむかという研究方法論を示しており，ここにこの学校の性格が明確に表現されている。この学校の実践を総括した海老原治善も,「第四にあげられている科学的研究を基礎とする教育が一番ふとく展開されているように思われる」と述べている[3]。

初年度こそ学級定員30名に対して1学年26名，2学年6名の応募にとどまったが，翌年からは入学希望者もふえ，大正11年9月に1学年秋期入学組が加わって12学級が揃い，総数335名の児童が在籍することになった。この間，この学校における従来の公立学校にはみられない新しい試みとして，①4，9月の年2回入学制，②学級定員を30名以下とする，③児童の能力によって上下の学級に移動する，④高学年では学科担任制をとるなどがあり，さらに教科目の編成と始期，授業時間数，教材配当などに文部省令によらない実践がとり入れられた。大正12年度の学年別(各2学級)教科と時間数は次の通りである[4]。

| | 修身 | 読方 | 聴方 | 読書 | 綴方 | 書方 | 美術 | 音楽 | 体操 | 数学 | 理科 | 地理 | 歴史 | 英語 | 特別研究 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1学年 | | | | 12 | | | 3 | 2 | 3 | | 2 | | | 2 | | 24 |
| 2 | | 5 | 2 | 2 | 2 | | 3 | 2 | 3 | 5 | 2 | | | 2 | | 28 |
| 3 | | 5 | 2 | 2 | 2 | | 3 | 2 | 2 | 5 | 2 | | | 2 | | 28 |
| 4 | 1 | 5 | | 2 | 2 | 1 | 3 | 2 | 2 | 5 | 2 | 2 | | 2 | 2 | 31 |
| 5 | 1 | 4 | | 2 | 2 | 1 | 3 | 2 | 2 | 5 | 2 | 1 | 2 | 2 | 2 | 31 |
| 6 | 1 | 4 | | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 2 | 5 | 2 | 1 | 2 | 3 | 2 | 31 |

注）　1時限の長さは低学年約30分。中学年35分。高学年40分位。

これを大正８年改正の小学校令施行規則が定める基準と比較すると，①低学年に聴方科を設け，修身は４年からとする（規則では１年から），②全学年に読書科を特設，③理科を自然科として１年から（規則では４年），④数学を２年から（規則では算術を１年から），⑤英語，特別研究の導入などに顕著なちがいがある。

教育事実を対象化し，科学的研究で基礎づけられた実践を指向するこの学校の成果は，大正８年に始まる『成城小学校研究叢書』全16篇の刊行，９年の教育問題研究会の発足と機関誌『教育問題研究』（以下『教問』と略す）発行，さらに公開研究会などで世に問われているが，昭和２年に，この間の実践と研究をまとめて『現代教育の警鐘』を刊行している。このなかで創設以来の教育課程改造研究の結果,「独創的研究」として次の成果が明らかになったとしている。[5)]

1　自然科を１年から特設すること
2　修身科は４年から始めること
3　児童語彙の研究
4　聴方科の特設
5　漢字教授の改良
6　分量多読の効果について
7　読書科の特設
8　児童図書館の特設
9　綴方と読方との連絡
10　書方始期の問題
11　算術を２年から始めること
12　玩具による理科教授
13　歴史地理を４年より課すること
14　英語科を初学年より課する可否
15　小学校における劇教育
16　図画手工教育の連関
17　小学校に於ける映画教育
18　児童読物の研究
19　ダルトン案教育の実施
20　二重学年制の実施

これらの諸成果のうち，相互に関連の深い「読書科の特設」,「児童図書館の特設」,「児童読物の研究」について，初期の成城小学校におけるその実際をさぐることにより,「学校教育において欠くことのできない」（学校図書館法第１条）とされる学校図書館のあり方を考えるための歴史的遺産をたしかめようとするのが本稿の課題である。

## II　成城の読書教育

明治末から大正初期にかけて，国語教育界では,「読み方は自己を読むもの」だと主張した芦田恵之助や視察してきたドイツの様子を「各教室は児童図書館（キンダー・ビブリオテーク）を有する。その学級に適した少年文学が入れてある。毎週一冊ずつ家庭で読ませる」,「日本のやうに徹頭徹尾教科書にぶら下ってはゐない」と紹介した保科孝一などによって，国語読本以外に巾広い，多くの読書を児童にすすめる必要が説かれていた。[6)] 大正６年に創設された成城小学校は，

そうした気運のなかで，当初より読書教育に意欲的にとりくんでいる。

初期の成城における実験学校としての顕著な実践に国語教育の改造がある。読方，書方綴方からなる当時の国語科に対して，成城では聴方と読書を特設して指導した。この改造は,「科学的研究を基とする教育」を掲げた成城の同人が，沢柳の指導のもとに最初に手がけた「児童語彙の調査」に拠っている。調査は大正７年４月の１学年入学児童25名を対象に，辞書から選択した6857語について一語ずつ質問し，理解している語をチェックする方法で行われた。その結果，沢柳が当初予想した2500～3000語という線を大きくこえて，彼らが平均4089語の語彙をすでにもっていることがわかった。[7)]

沢柳はこの結果をもとに,『教問』第３号に「読むことと書くことは並行しない」，４号に「吾語に四種の別あるを論じて国語の新教授に及ぶ」を執筆した。読むことを書くことに先行させて指導すべきだという提唱であり，耳から聴く言葉を重視しようとする主張である。そこで成城では低学年について聴方科を設け，お噺を中心とした聴く経験を通して，言葉の学習とお噺のもつ内容的な価値を習得するようにした。それは「分科としては便宜上国語の一科に置かれて居るが，実は国語，修身，歴史の三科を主要目的とする独特の教科である[8)]」と考えられた。

新入生の語彙がすでに平均4000語におよぶことをたしかめるとき，分量が少なく，読むこと，書くことを同時的に進める考えでつくられた国語読本にしがみついた国語教授は，まったく児童の実態にそぐわないものになり，たくさん聴くこと，読むことが重視されることになった。さらに他教科指導においても読書の必要が提起される。内田庄次が歴史教育の立場から,「児童の読書力が一般学習活動に如何に重大なる意義を持って居るかといふことは，改めて僕が言ふまでもない事だと思ふ。特に我が校に於けるが如く高学年になるに従って主として児童の自学を本態とする学習組織に於いてはもっとも基本的の学習要件となっていくものである。転校児童の共通的欠陥とも思はれるものは，読書力の不足といふ事が目立って見える[9)]」と述べ，転校児童に大いに読書をすすめていることを語っている。成城の読書教育は，こうした多読のすすめ，各教科の学習の基礎となる能力としての読書力の獲得に向けてとりくまれた。

「読書教育」という言葉は当初から使用されたわけではなく，実践を重ねるなかで昭和初期になって，特設の読書科における教育に限定して使われるようになったようだ。岸英雄が『カリキュラム改造の研究』においてその概念を整理している。すなわち,「読方教育と読書教育は陶冶の内容が異る。読方教育は読方の基礎能力を賦与し，文読解の根本的態度を育成するのであるから，教師の指導と教授が是非とも必要であり」,「読書教育は児童の既有の読書力によって自由に好むものを読ましめ，その読書をして最も能率的たらしめる所に指導の目標がある。」従って児童の豊かな読書趣味を育て，読書経験をひろげようとすれば，読方指導だけでは不十分であり，読書教育が欠かせないと述べている。[10)]

特設時間における読書教育の目的は，①児童の読書力を各児童の力に応じて自由に伸展せしめること，②正しき読書趣味を培養すること，③能率ある読書法の指導，④図書館道徳の涵養，⑤読書衛生におかれた。週１～２時間の「読書の時間」には，児童は図書室で各自好むものを自由に書架から選択して読むように奨励され，教師はあくまで児童の相談相手であって，できるだけ児童の自発性にゆだねられた。高学年の場合には，読書発表会をしたり，読んだ大意を書かせることもあった。児童は全員が「読書日記」をもち，読んだ本の書名，著者をノートし，感想や批評を書くことで読書法を学ぶように奨励された。

「読方」においても教科書にとらわれない豊富な教材の活用と系統化が研究され，実践

されている。学年別読方教材の配当は次のように表示される。[11)]

| | 1 学 年 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 国語読本 | 1－3 | 4－6 | 6－8 | 9－10 | 10－11 | 11－12 |
| 文学読本 | 1－2 | 3－4 | 5－6 | 7－8 | 9－10 | 11－12 |
| 詩　集 | 低学年用 | 低学年用 | 中学年用 | 中学年用 | 高学年用 | 高学年用 |
| 単行本 | 日本童話（上下）<br>こどもイソップ<br>サルとカニ | 日本伝説（上下）<br>こどもアンデルセン<br>ひろすけ童話読本 | 日本神話（上下）<br>こどもロビンソン<br>幼なものがたり | 源氏と平家<br>大男と小男<br>クオレ物語 | 児童太平記（上下）<br>青い鳥<br>砂丘 | 児童国文学<br>西洋文学史<br>武蔵野 |

国定読本を金科玉条としない成城の同人たちにとって，教科書がもつ①分量があまりに少ない，②児童の心に触れるものが少ない，③詩歌教材が少なく，かつ詩的価値に乏しい④作者の個性あざやかな作品やまとまった一つの生命をもつ文学的作品が少ないなどの欠陥を補う新しい教材が不可欠であった。大正７年の『赤い鳥』創刊から昭和８年の『サクラ読本』にかけては，多種の副読本が刊行された時期であるが，成城の同人たちも独自の児童文学読本や詩集を編さんするとともに，単行本を教材にとり入れている。

## III　成城の児童図書館と図書館教育

創立当初より読書教育に力を注いだ成城小学校であるが，図書室設置は「稍々それに後れて誕生した」といわれている。成城中学校所有の古い木造２階建校舎を借り受け，普通教室３，特別教室５室の約200坪で発足した成城小学校では，専用図書室を設けるまでにはいたらず，学級文庫と各教室に参考図書を備える形態がとられた。だが大正12年発行の学校要覧『成城小学校』では，すでに図書室の存在が記されており，蔵書約600冊，月刊誌数種のほか内外の画集，写真，肖像画などを集めている。

当時の図書室の実際を明らかにする手がかりは乏しいが，いくつかの資料を総合すれば普通教室一室分を充てた部屋の両側に書架を配し，㋑童話・伝説・神話，㋺童謡・詩歌，㋩外国文学の児童化したもの，㋥国民文学の児童化したもの，㋭歴史物語・伝記・戦争文学，㋬地理・旅行記，㋣趣味ある博物・化学・科学者の伝記，㋠音楽・美術・建築に関する手引，肖像，写真，㋡科学工芸，㋧辞書類に図書を主題で分類し，書架上で低学年向，高学年向に区別した。蔵書はすべて校費で購入したもので，将来については父兄後援会からの補助を期待している。部屋の中央に一学級を収容できる数の閲覧机と椅子（講堂用の長椅子で１脚に４～６人がけ，背もたれなしの質素なもの）を備えた。

成城では大正11年からダルトン・プランの研究と実践に着手している。この方法を十分に活かそうとすれば，普通教室，特別教室ともに相当の図書をはじめとする学習資料を備え，必要に応じて児童がいつでも使えるようにすることが不可欠である。そこで図書室はそれらの各教室に備える資料の供給基地となるように運営された。

大正14年に郊外の砧村に開設された成城玉川小学校（昭和３年に至って牛込の学校を合併して成城小学校と改称）では，牛込時代の経験を生かして当初より児童図書室を設置し，図書館教育に力をいれている。「児童図書室便り」からその実際をみてみよう。

「成城の児童図書室は確かに子供達の精神運動場である。昼の休み時間や或は放課後に

子供達が森の中や運動場で楽しく遊んでいる様に，児童図書室の中にも必ず幾人かの子供が静かに読書に余念のないのを見受ける。」本を読みたいという児童の欲求を十分みたしてやるために，図書室の本はできるだけ簡単に，自由に借りだせるようにした。図書は利用されてこそ尊いのだという考えから，すべて消耗品扱いとし，貸出を重視した。そのため蔵書の２割程度はたいていいつも借りられていたという。「今後の図書館事業は主として貸出方面に，もっとも発展する必要があらうと思ふ[12]」という認識がそのなかから生まれている。貸出は３年生から利用でき，学年別につくられた「借出記入簿」に，借りだした月日，書名，学年，氏名を記入し，返却時にはその月日を記入する方式を採った。貸出期間は10日で，月に１回，教師が係の児童とともに借出簿を整理し，返却の遅れている児童があれば注意を促すようにした。

図書室は，特設の読書科の場であるとともに，読方科をはじめ各教科の学習で必要な図書や参考資料を提供するほか，休み時間や放課後の自由読書に利用された。「本校図書室は決して設備の点で特筆すべきものはない。ただ開放的で書物の出入に便であることと，かなり広く，量的にも多くすぐれた児童図書を蒐集してゐる点が特長である[13]」と岸英雄が述べているが，成城の教育活動全体のなかでその必要性が強く認識され，図書室経営と図書館教育の研究，実践に多くの同人が積極的に参加していることが注目される。

昭和６年９月になって念願の児童図書館が独立の施設としてつくられた。総面積46坪余の２階建の図書館が森のなかに誕生，蔵書約３千冊を擁した。「開館されるや満員の盛況で，読書科の時間はもちろん，課外の時にも利用され，成城小学校の学習組織上に一新紀元を与えることになった」と学園史は伝えている[14]。この図書館は，昭和20年５月25日に戦災により焼失している。

## Ⅳ　成城の同人による学校図書館研究

創立10年の「独創的研究」に掲げている諸項目からも明らかなように，教科の改造と結びついた図書館経営，児童図書室を場とする読書科の特徴は，実験学校として発足した成城小学校のとくに初期における主要な研究であり，実践であったといってよい。創立者である沢柳自身の成城の研究に対する評価として，国語教育の改造を「一番わが意を得たりというふうに自信を持って言っている研究の一つのモデルではないか」と中野光が指摘しているが[15]，それと不可分に関連しているのが図書館についての研究と実践である。その成果は，『教問』誌上および成城の同人たちの共同著作である『現代教育の警鐘』，『カリキュラム改造の研究』に発表されている。さらに成城の実践をもとに二種の児童図書館経営に関する図書が編まれている。いまその主要なものを発表順に掲げてみよう。

大10．２　　古閑停　「児童図書館の必設を望む」『教問』11号
　11．１～４　田中末広　「児童図書室と児童読物」『教問』22，24，25号
　13．８　　岸英雄　「読書時間の特設に就いて」『教問』53号
　14．１　　児童図書館特集　『教問』58号
　　小原国芳　「児童図書館の必要」
　　奥野庄太郎　「欧米に於ける課外読物の状況」
　　鷲尾知治　「児童図書館の経営」ほか
昭２．６　　浜野重郎　「児童図書館設置の提唱とその後の研究」『警鐘』収録
　　11～12　図書館と読書特集　『全人』16，17号

小原国芳　「目玉のない学校と人間」ほか

3．11　谷口武・浜野重郎共著　『児童図書館の経営方法と優良図書目録』　第一出版協会

11　奥野庄太郎著　『児童文庫の経営と活用』　明治図書

5．4　岸英雄　「図書室における訓育」　復刊『教問』45号

6　座談会・児童図書館問題　松本浩記ほか　復刊『教問』47号

12　岸英雄　「読書教育の提唱」『カリキュラム改造の研究』収録

6．12　特集・図書館教育　復刊『教問』66号

田中末広　「小学校に於ける図書館の利用」

山下克己　「児童図書館経営」　ほか

これらのほかに，読書教育，児童読物，読方指導，学級経営等に関して書かれたもので，図書館とのかかわりについても言及している論稿が少なくない。

図書館研究に先べんをつけた古閑停は，日本人の読書生活が貧しいこと，だが子どもたちは本に対する強い欲求をもっていることを論じたうえで，それに対して「家庭や学校や社会や国家は何と見て居るか，何を試みて居るか」を問い，「児童の読書欲の萠芽は蹂躙せられつつありはせぬか」という視点からどの学校にも児童図書室を必設すべきことを説いた。その論拠に教科書に対する鋭い批判がある。「一学年間一冊や二冊の教科書以外何を与へたか。而してその教科書は児童の要求に添ふだけの内容を蔵して居るか」。分量不足の教科書を万能視しすぎている。そこで「国定教科書の短を補ふべく課外読本の必要を痛切に感じ，児童図書館の必設」を考えたが，それは単に読方教授の改造にとどまるものではなく，「凡ての教科もこの読物によりてはじめて真実の学習をとげ得るものである」と結んで，読書による経験と読書する能力や態度の習得を学校の教育活動として重視するよう提起した。

すでに第Ⅰ章でみたように，『教問』創刊号以来，沢柳や奥野庄太郎ほかによって，児童語彙の調査をふまえた国語教育の改造，聴方科の導入，児童読物研究がとりあげられ，それらが児童図書館の経営と活用につながる先行研究をなすのであるが，『教問』で図書館教育を最初に論じたのは田中末広である。田中は，図書室において一冊の本を書架から取りだす子どもには，「自分の力で自由に書籍を読破せんとする気分が満ち満ちて」おり，それは自分の趣味と力に応じた「児童の個性を重んずる」真剣な経験であるとともに，「単に読書の趣味を養ふばかりでなく，もっと広く一般に研究的な刺戟を受けることが多い」とその意義を説き，図書室の経営法（図書購入費，目録，貸出法など），読書の時間，読書指導と教師の役割，図書館利用指導などについて述べている。その後の同人たちの発言に共通することだが，学校における図書室設置の必要性についてもはや論ずるときではなく，いかにそれを実際につくり，運営，活用していくかに関心が強く向けられ，その実践に力を注いでいることが特徴的である。

図書館と教科学習との関係について，田中はのちに十余年の経験をふまえて次のように総括する。「教授法よりも児童の学習そのものが重要される教育に於いては，児童自身の活動範囲が益々拡大される。その一つの仕事として，児童が自由に参考書を利用して，学習に使するといふことが愈々多くなって来るのである」。この要求にこたえられる図書館は，「単に児童文学とかいふやうに一方に偏した読物だけでは不十分である。各教科に関係して各方面の材料を包含する児童図書を蒐集して置かねばならない。そしてこれも教科に依って，あるひは学年の程度に応じて整理設備しておくことが必要」であり，さらに図書館と各教

室との関係を緊密にすることが重要である。それによって,「小学校が，図書館中心に考へられ」,「自学を主とする学校に於いては,この図書館の完備と，その利用の如何は，教育能率に最も重大な関係を有することになる」。[16)]

小原国芳主事もくりかえし図書館の重要性を強調し，図書館のない学校を「眼玉のない学校」だと批判した。「ホントによい本が山ほど与へられたら，もうそれで国語教授の大半は出来上ったとまで極言したい」と多読を説くほか，個性尊重，趣味の涵養に加えて教師の研究と教養のためにも図書館の充実が「絶対に必要」だと指摘している。

図書館についてのこうした強い関心は，同人たちの手でいくつかの実証的，実際的な研究を深めた。その第一は児童図書の研究である（児童図書の研究が学校経営として図書館を生みだしたということが基本にあり，さらに図書館経営が児童図書研究を要求するという関係を重視したい)。成城小学校が発足したのは,『赤い鳥』創刊（大正７年）に象徴される新しい児童文化が興る時期であり，やがて昭和にはいると『小学生全集』と『日本児童文庫』の二大叢書をはじめとする児童図書の普及期を迎える。「第一自学に使う児童用の参考書が殆どなかった。これを集めるのに苦心したが，如何に苦心しても児童向きのものは見つからなかった。そこで自学をやる以上，参考書を自分で作らなければならないことになった。この仕事は単に自学用参考書として役立ったばかりでなく，児童少年の読物として大いに貢献した」[17)]と回想される時代から,「昭和の時代は寧ろ書物の多きに苦しみ,良書の選択に迷ふ実状である。月々の書店の店頭に雑誌は山積され，円本は洪水の如しと言はれる」[18)]時代へと大きく変貌する時期に，成城の図書館教育はとりくまれた。そこで既刊の児童図書を研究し，良書の選択，紹介を重視するとともに（奥野の著書に紹介される「学習室文庫」の編成はその一例),学校の教育活動に必要なものをつくりだすことに関心が向けられた。『玉川児童百科辞典』の企画や同人たちの手による副読本,児童読物つくりがそこから生まれている。[19)]

第二に児童の読書実態調査をいくつも手がけている。大正13年に１年生を除く全児童が読書の時間に読んだ本を４ケ月にわたって調査[20)]したほか，各学級での読書傾向や読書速度の調査，児童の蔵書調査などをしばしば行ない，その結果を読書教育に活用している。

第三は経営法，とくに図書購入予算の確保と図書館運営についてである。購入費を学校予算のなかに組むほか，労作によってそれを獲得するなど教師と児童が図書室づくりに力をだしあう方法，図書室の自由な利用をひろげる運営方法，設備・備品の研究等が成城の経験をふまえて奥野，谷口・浜野の著書に集大成されている。

## Ⅴ　成城の図書館教育――その意義と影響

わが国における学校図書館（とりわけ初等学校における）の歴史をたしかめるとき，学校図書館つくりが学校改造をめざす教師（集団）の実践がすすむなかではじめて可能であるし，さらにその実践を支え，促進するものとして図書館が一定の役割を果し得るのではないかという観点から，これまで若干の研究を継続してきた[21)]。本稿もまたその一環をなすものであるが，これまでの考察をもとに，成城の児童図書館の実践とそれにかかわる研究がもつ意義とそれが及ぼした影響について整理してまとめにしたい。

1）　沢柳の「実際的教育学」の探求，科学的研究を基とする教育をめざした実験学校としての初期の成城教育において，読書教育およびその拠点としての図書館（教育）はその成果の著しいものであった。児童の語彙をたしかめることにより国定読本の貧国を明らか

にし，その欠を補う副読本つくりと大量の読書の奨励，さらにダルトン・プランに欠かせない参考図書の整備と活用，そして「個性尊重の教育」のなかでもとりわけ自由な雰囲気のもとでの読書教育の学校ぐるみの実践等は，児童の成長過程と関連づけた教育課程の改造であり，そのための必然的な帰結としてつくられた児童図書館は，まさに「学校の教育課程の展開に寄与する」(学校図書館法第２条）ものであった。設備としてどんなに貧しいものであれ，そこに明確な役割と機能が認識されていたことは,『教問』で図書館を論ずる同人たちの顔ぶれが各教科にわたっていることにも明らかである。その意味で，上に述べた学校図書館が学校のなかに生き生きと存在し得る根拠を実証する典型的な事例であり，わが国の初等学校として，学校教育の必要から本格的に図書館を設置し，経営した最も早い時期の代表的なものといってよい。

2） 教育改造を支える学校図書館という側面でとくに注目されるのは,『教問』58号（大正14年１月）の児童図書館特集である。新学校をはじめ公立学校の一部においてもさかんになっていた副読本の活用に対して，文部省がその前年，正課において国定教科書以外の教材を使用することを規制する指示を行った[22]。この号は，いわばこの指示に対する反論特集といった内容であり，各執筆者が読書教育，図書館教育の経験に即して,「実につまらない本とうにお話にならないほど滑稽な話である」(奥野),「極めて時代錯誤的な訓示」(小野誠悟),「訓令の解釈を教育的に常識的にせねばならない」(小原）などと一斉に批判を加えた。これはこの学校の場合，図書館が多様な教材を組織化し，提供する拠点として，教育活動と深く関連して設置，運営されていたことを示すとともに，教育事実に即した研究とそこでたしかめられたことを実践のなかで改革していくという沢柳精神の具体化として高く評価されよう。

3） 成城にかぎらず当時の新学校はそれぞれ機関誌をもち，その主張や実践をひろく世に問うている。成城の場合は『教問』がそれであり，そこに図書館がしばしばとりあげられることにより，図書館のある学校，学校のなかの図書館についての認識を普及せしめた功績は大きい。おそらく教育雑誌で学校図書館をこれほど積極的にとりあげたものは他にないだろう。この雑誌を手にする会員は創刊１年ですでに朝鮮，台湾を含めて全国で2428名を算えており[23]，さらに小原の『自由教育論』をはじめ諸論講，講演を通しての「眼玉のない学校」批判，奥野，谷口・浜野の著作を通して学校図書館が必要かどうかではなくそれをいかにしてつくり，運営していくかをひろく提起したことの意義は大きい。

成城の図書館にふれることが自校における図書館つくりを推進したという証言も少なくない。一例として，大正12年に農村の小学校に赴任した群馬の小林徳衛の発言をみよう。「当時の学校予算には，学習の参考図書はいふまでもなく，児童読物の購入費など殆んど皆無だった。そこで寄付帳をつくり，若い教師達で村内を分担してかけ廻り，三円，五円と寄付募集をやった。おかげで千五百円ほど集った。そこで早速成城小学校を視察し，学習参考書や児童読物を購入し，一室を図書館として開設し，新教育の推進に情熱を傾けたのであった」[24]。

4） 読書の時間をカリキュラムに特設し，低学年の聴方とともに綜合教科的な性格として位置づけたことは，教科の改造として特筆される。それは読書指導が読解を中心に国語科のなかに矮小化されがちな今日の状況に対して，先駆的な実践として意義がある。そのことを評価したうえでさらにいえば，成城の場合，図書館教育は国語科の改造に主眼があったことは明らかであり，その点でやや遅れて実践されることになる野村芳兵衛――戸塚廉，そして生活綴方やプロレタリア教育運動に参加する教師たちによる児童文庫づくりと

はその着想を異にする。読書の生活化，課外よみものによる教育内容の改造という観点が後者の場合には強く志向されていたからである。

5) 戦前，図書館界において学校図書館についての論議が活発になるのは昭和２～４年頃である。これは文部省が「御大典記念事業」として学校に児童文庫の設置を奨励したことによるところが大きい。だが戦前の学校図書館をめぐる論議で特徴的なことは，教育界と図書館界との接点がきわめて希薄なことである（この問題は，戦後の学校図書館の制度的発足に際しての公共図書館側のかかわり方，その後の学校図書館のあり方にも影響が大きいと考えられるが，これについては稿を改めたい）。この傾向のなかで，成城の実践は小学校付設の東京市立図書館の運営に部分的にとり入れられているし，逆に今沢慈海等の児童図書館論を成城の図書館経営に参考にしているようにみられるなど，戦前における学校と図書館界とが接触をもった数少ない事例であった。ここでも『教問』の果した役割とともに，小原国芳の精力的な活動に負うところが大きいだろう[25)]。

6) 成城の実践と研究を手がけた教師自身の手で２種の学校図書館経営法がまとめられたことは，学校図書館の制度化に向けての重要な一歩であった。だがそれが個々の学校に図書室をひらき，それを運営していく手びきとされるときには，たえずその学校の教育実践を基点に問いなおされることがなければ，図書館はひっそりとした本の倉庫に堕し，形骸化することを避けられない。わが国の戦前の学校が，そのような意味で学校図書館を学校経営のなかに十分根づかせるには制約が大きすぎたことは認めねばなるまい。

〈付記〉　本稿執筆に際して成城学園初等学校竹下昌之教諭，成城大学図書館関戸信夫司書から資料の利用につきお世話になった。ここに記して謝意を表する。

注
1) 沢柳政太郎『実際的教育学』　同文館　1909，Ｐ.25
2) 沢柳政太郎編『現代教育の警鐘』　民友社　1927，Ｐ.1
3) 海老原治善『現代日本教育実践史』　明治図書　1975，Ｐ.89
4) 『成城学園五十年』　成城学園　1967，Ｐ.316
5) 『現代教育の警鐘』　Ｐ.９－10
6) 滑川道夫『現代の読書指導』　明治図書　1976　Ｐ.98－106
7) 沢柳政太郎・田中末広・長田新『児童語彙の研究』(成城小学校研究叢書１)同文館　1919
8) 『成城小学校』(学校要覧)　1923　Ｐ.28
9) 内田庄次「読書教育の効果と国史教育」『教問』復刊66号　1931，Ｐ.52－54
10) 岸英雄「読書教育の提唱」(成城小学校編『カリキュラム改造の研究』第一出版協会　1930，Ｐ.85－98)
11) 岸英雄「読方教材論」『教問』復刊47号　1930，Ｐ.30－Ｐ36
12) 谷口武・浜野重郎『児童図書館の経営方法と優良図書目録』　第一出版協会　1928，Ｐ.68
13) 岸英雄「読書教育の提唱」　Ｐ.98
14) 『成城学園五十年』　Ｐ.352
15) 中野光「沢柳の初等教育改造論」『沢柳政太郎研究』34号　1977，Ｐ.10
16) 田中末広「小学校に於ける図書館の利用」『教問』復刊66号　1931，Ｐ.33－36
17) 上里朝秀「成城教育の回顧２」『成城教育』２号　1956，Ｐ.20
18) 岸英雄「読書教育の提唱」　Ｐ.88
19) 小原国芳『夢みる人』(『小原国芳全集』29　玉川大学出版部　1963)　Ｐ.234－５，

340－2

20) 岸英雄「児童読物の調査」『教問』58号 1925, P.30－46

21) 『学校図書館と児童図書館』(『日本図書館学講座』5 雄山閣 1976) の第2章「子ども・学校・図書館――教育運動のなかに図書館要求をさぐる」に執筆。

22) 大正13年9月に松本女子師範付小で川井訓導事件が起き，翌月，奈良女高師付小に対して文部省が「教科書を使っていない，法規に反している」と非難を加えている。これらは文部省の一連の施策の反映とみられる。

23) 『成城学園五十年』 P.308

24) 小原国芳編『日本新教育百年史5 関東』 玉川大学出版部 1969, P.210－1

25) 『日本の新学校』(1930年) による明木図書館の紹介，『全人』16, 17号の図書館特集の編集などにその一端がうかがえる。

## Library Education in Seijo Elementary School

Noboru Shiomi
(Department of Pedagogy)

This paper is one of historical studies of school library movement in Japan.

On April 1917, Dr. Masataro Sawayanagi established Seijo Elementary School. It was the experimental school based on the educational theories of Sawayanagi that was described in "Practical Education" published in 1909. It tried unique practices in the learning method and curricular reform that could not be found in the public school at that time.

One of the results of education done in this school was reform of Japanese language instruction: setting an hour of hearing, reading and building school library. So many teachers in this school encouraged their pupils to read and promoted library education. This practices was widely announced through a journal "Kyoiku Mondai Kenkyu", lectures and workshops etc., and could made enlarged image of "library in school".

Seijo school library had been opened as response to changes in curriculum and got their place in instruction process. We can say that it was the first and best provided library of elementary school in pre-war Japan. The practices of this school disclose that school library is indispensable for school education.